

幕末明治の写真師列伝 第七十回 武林盛一 その一

幕末の北海道では函館から写真は始まった。その代表的な写真師は、函館のロシア領事ゴシケヴィッチから写真を学んだ木津幸吉や田本研造（音無榕山）、横山松三郎の弟、横山松蔵ということになるのだが、本稿では田本研造の弟子で、札幌で最初に写真館を開業した武林盛一について記すことにする。

武林盛一の基本的な伝記資料としては、『写真新報』5月号第116号（写真新報社、明治41年（1908））所収、武林磐雄（いわお）『【談叢】故武林盛一略傳』、明治41年（1908）刊行の武林写真館同窓会武量会編『武林写真館五十年誌』（東京国文社、1922年）、武林写真館同窓会武量会編『武林写真館 百年の歩み』（札幌写真印刷、1972年）や、作家武林夢想庵（武林盛一の養子、磐雄）が記した『むそうあん物語』全43巻（むそうあん物語発刊委員会）、岩佐博敏編『北海道写真百年史』（札幌写真師会、1970年）、新札幌市史編集室編『札幌の歴史』第10号（札幌市教育委員会文化資料室、昭和61年（1986））所収、渋谷四郎『札幌写真事始』、函館市史編さん室編『地域史研究 はこだて』第17号（函館市、1993年）所収、桑嶋洋一「函館写真史考（上）」、函館市史編さん室編『地域史研究 はこだて』第18号（函館市、1993年）所収、桑嶋洋一「函館写真史考（下）」、佐藤清一『函館文化発展企画1 箱館写真のはじまり—幕末から明治』（五稜郭タワー株式会社、1999）などが主なものとなる。また、北海道の写真史についての先行研究としては、岩佐博敏、越崎宗一、伊奈信男、小沢健志、渋谷四郎、桑嶋洋一、佐藤清一の著作や論考などに書かれている内容を参考にさせて頂いた。

武林盛一（幼名：亀蔵）は天保13年（1842）1月16日、陸奥国弘前で生まれる。父は大道寺家十代族之助順正（やからのすけ）という人で、幕末に陸奥国津軽郡黒石藩津軽家一万石（最後の藩主は四代津軽承叙（つがるつぐみち））の家老を勤めた十一代大道寺繁禎（しげよし）の腹違いの兄にあたる。この人は非常に剛毅な人物で、兄繁元が亡くなった後の、天保10年（1839）、31歳で家老職に就き、文久2年（1862）に享年54歳で亡くなるまで24年に渡って在職し、多大な功績を残した。武林盛一が生まれたのは、この族之助順正が34歳の時のことであった。黒石藩は江戸時代後期に黒石における知行と弘前藩による蔵米によって一万石を領した小藩である。

母は津軽の鱒ヶ沢港に廻船業を営んでいた万兵衛（瀧浦萬五郎）の娘で、その美貌を望まれて大道寺家に女中奉公にあがったのだが、やがて族之助順正のお手がついて身重となり、武林盛一を産んだのである。しかし、大道寺家ではその体面を重んじて、少なからざる黄金と書付を持たせて、密かに母子を鱒ヶ沢の親元に返すことにした。武林盛一はまだ生まれて間もない時に母に抱かれて弘前を出ると、陸奥国鱒ヶ沢港へ下向する。その後、母は産後の肥立ちが良くなかったことと、心の悲しみが病をつのらせて、幾時もせず亡くなり、武林盛一は孤児となってしまった。このため、母の父、万兵衛（瀧浦萬五郎）はこの赤子に亀蔵と名付け、自分の子として人知れず育てることにした。この頃に、万兵衛（瀧浦萬五郎）は姓名を改めて、武林萬五郎と称することになったといわれている。

また、武林夢想庵『むそうあん物語』によれば、まだ身重の母が実家に戻されてから、武林盛一を産み、この母が亡くなると、黄金は万兵衛が着服して、書付は焼いてしまい、産まれた子は万兵衛が

亀蔵と名付けて、人知れずに我が子としたともいわれている。

武林夢想庵『むそうあん物語』によれば、この母の実家の祖先は、元禄の頃に若狭国の瀧淵という一寒村から六六部が一人さすらいの旅に出て、諸国巡礼の末に陸奥国鱒ヶ沢に落ち着いたという。それからこの放浪者の末裔が、150年も経つとこの鱒ヶ沢の漁村で誰も知らぬ者もない四軒の旧家の内の一軒になったといわれている。『むそうあん物語』ではその姓を瀧淵の万兵衛としているが、本稿では武林磐雄『【談叢】故武林盛一略傳』、武林写真館同窓会武量会編『武林写真館五十年誌』等に記された「瀧浦萬五郎」と記すことにする。

嘉永6年（1853）、津軽沿岸を襲った大時化のため、それまで隆盛であった豪商瀧浦萬五郎もこの時に持ち船を破損し、全ての財産を一夜にして失くして、破産、無一文となってしまった。そのため武林一家は、青森付近の港口に移り住み、その後も各地を転々として、職も変えて流れ着いたのが、海峡を越えた新開地函館の地であった。

この頃の亀蔵はまだ12歳であったが、貧窮の一家の助けとすために屏絵を描き、日に数文銭を稼いで家計の足しにするという生活であった。時には再起の望みもなく自暴自棄になって、放埒な生活をしていた養父（実際は養祖父）萬五郎の後に随って重荷を背負い、歩いて函館の遠方まで出稼ぎに行っていたのもこの頃のことである。

亀蔵は養母（実際は養祖母）から自分が侍の種であることを聞き、どうかして自分も武士になりたいと常々考えていたが、安政6年（1859）、亀蔵が17歳の時、函館奉行所調役、村上愛助の邸に雇われることになり、村上の推挙によって足輕に取り立てられて、その後さらに、五稜郭の函館奉行所の門衛になり、文久2年（1862）3月、運上所で増員があった際には、函館港出入りの船舶の検閲掛に抜擢されることになった。亀蔵はこれが縁で、明治維新後、開拓使が設置されると、開拓使官員に登用されることになる。このことは次の明治2年（1869）10月付、武林亀蔵自筆の進退届（北海道立文書館蔵、簿書〇〇一五九）で確認できる。

「本国正国共陸奥 武林亀蔵 私儀旧幕之節足輕高四石二斗二人扶持ニテ同心代り沖之口掛り相勤罷在候処昨辰年四月中御裁判所御取建之砌於当地御引継相成同五月生産方沖之口掛り趨事席被仰付御給禄米十五俵金五十両頂戴仕相勤罷在候処同年十月中知府事殿御引揚ケ之節運上所江御達之趣モ御座候間潜伏罷候処当五月十一日御打入之砌遊軍隊へ組入ニ相成罷在候内同月下旬民政局ヨリ謹慎被仰付深謹慎罷在候処六月中謹慎被免附属被免九月中御呼出ニテ刑罰局附属被仰付御給禄一カ月金七両ヅツ頂戴仕是迄御奉公相勤罷在候 依之此段申上候 巳十月 農政局附属 武林亀蔵」

しかしながらこの間にも亀蔵は余暇に小倉木綿を使って刀の柄巻きを内職にして家計を助けていた。この五稜郭の函館奉行所時代に亀蔵はキャンバスに向って洋画を描く技術を好み、時計器械の構造にも興味を持ったが、写真術の素晴らしさに心を奪われてしまった。この当時、亀蔵は船舶の検閲掛として、度々、外国軍艦に出入りして、その士官たちと親交を結び、彼らが持っていた写真機を見て大いに好奇心を抱いたのである。

（森重和雄）